



「カンカンカン」――。

8月の夕暮れ、津奈木干拓では鐘の音が鳴り響きます。

津奈木の盆の風物詩「競舟大会」に向けて、各地区の選手たちが練習に励んでいました。

「鐘の音を聞くと、盆がやってきた」と言うほど、町民に親しまれてきた伝統行事。しかし、悪天候やコロナ禍で6年間も中止が続いていました。

今回は競舟の歴史や選手たちの熱い闘い、そして伝統を守ろうと奮起する人々の姿をお届けします。

【特集】町民体育祭競舟大会

津奈木の海に 響く鐘の音



平成 27 年まではうたせ舟からスタートをしていました



昭和 54 年の競舟大会。多くの人でにぎわう大泊漁港



昭和 36 年頃の木製の競舟。当時は 1 艇に 20 人以上が乗っていました

受け継がれてきた伝統

今では津奈木の夏の風物詩とも言える競舟大会。そんな競舟はどのようにして始まり、どんな歴史を歩んできたのか。競舟のルーツと現在までの移り変わりについて迫ります。



このために競漕させたのが始まりだと言われています。

昭和 41 年 8 月の公民館報には『盆は競舟と共にやってくるという言葉が百五十年も培われた町民感情である』と、当時の齊藤亀齡町長が記しています。現在から数えると、200 年近い歴史があるということになります。本町の競舟の歴史は、九州では長崎に次いで 2 番目に長い歴史があります。

海浜地区行事としての競舟

本町での競舟は、昭和 39 年までは大泊地区と赤崎地区の盆の地区行事として、それぞれの海岸で開かれていました。海浜地区の若者が主役となり、にぎわいを見せていたそうです。当時は、木製の舟に漕ぎ手 20 人と艇長・鐘打ち・舵とりが各 1 人の計 23 人が乗っていました。

大泊地区の大会では、舂斗（水の京泊付近）から大泊漁港までの 1000 メートルがコースとなっていました。地区が持つ舟には名前がつけられていて、大泊地区が「海龍」、日当地区が「天竜」、日添地区が「朝日」。現在、町で活躍する海龍チームは、この大泊地区の舟の名前が由来となっています。

競舟の起源

競舟の元祖は「ペーロン」と言われており、その起源は紀元前 300 年頃の中国の戦国時代までさかのぼります。文人政治家の屈原は、楚国の王である懐王を助け、善政を敷いていた人物。しかし懐王が裏切られ、敵国に捕らえられてしまいます。屈原は楚の国運をなげき、汨羅（湖南省を流れる川）に身を投じました。人々は屈原の死を悲しみ、龍舟を浮かべ、その霊をなぐさめました。

この追悼の儀式がやがて龍舟を漕ぎ、速さを競い合う行事として定着していったのが「ペーロン」の起源と言われています。

日本、そして津奈木への伝来

ペーロンが日本へ伝来したのは 1655 年で、「飛龍」や「白竜」などの中国語の名残りが語源となっています。

本町の競舟の歴史も古く、大泊地区の競舟は江戸時代末から行われていたそうです。木材などを帆船で福岡などへ運んだときに、帰りに立ち寄った長崎で見たペーロン競漕を持ち込んで、漁の帰りの網舟同士の競い合いや縄張り争

町行事としての競舟

江戸時代末から約 150 年間続いていた競舟大会は、若者の減少による漕ぎ手不足と舟の老朽化が原因で昭和 40 年に一時中断してしまいました。大会中断を受け、青年たちをはじめ町民から競舟復活を叫ぶ声が大きく上がりました。そして、町が舟を造り、23 人乗りだったのを 15 人乗りにすることで、翌年の昭和 41 年には町の行事として復活を遂げました。これが第 1 回大会として開催され、一般の部に 11 チーム、中学生の部に 6 チーム、計 17 チームが出場しました。当時、ペーロン大会が開催されていたのは本町を入れて全国でも 2 つだけ。そのためメディアでも大きく取り上げられ、会場は多くの人でにぎわったそうです。

当初は、舂斗方面から大泊漁港までの 500 メートルの直線コースでしたが、干拓堤防が整備されたことから、平成 6 年の第 29 回大会からは現在の場所で開催されるようになります。平成 29 年からは悪天候やコロナ禍により中止が続いていましたが、コロナが収束しつつあることや天候に恵まれ、7 年ぶりの開催となりました。

津奈木町競舟史

- 昭和 39 年以前**
大泊地区と赤崎地区のお盆の地区行事として開催
- 昭和 40 年**
漕ぎ手不足と舟の老朽化で中止
- 昭和 41 年**
町行事として第 1 回競舟大会を大泊漁協前で開催。舟が町で造られ、23 人乗りから 15 人乗りへと変わる
- 昭和 56 年**
500 メートルコースで競漕
- 昭和 63 年**
B & G 財団津奈木海洋センター竣工記念競舟大会
- 平成元年**
干拓からも見れるようにするためコースの軽微な変更
- 平成 4 年**
合申漁港修築落成記念大会として、平国漁港で開催。このときは 400 メートルコースで競われた
- 平成 3 年**
舟が木製から FRP（強化プラスチック）製となる
- 平成 6 年**
舟が 15 人乗りから 13 人乗りへと変わる
- 平成 9 年**
会場が大泊漁協前から干拓堤防へコースが 500 メートルから 400 メートルへ変わる
- 平成 26 年**
試合形式の変更
- 平成 28 年**
旧・各チーム 3 回出場し、各回の得点の合計で順位を決定
- 平成 29 年**
新・トーナメント戦で順位を決定
- 平成 28 年**
400 メートルコースから 300 メートルコースへ
- 平成 28 年**
うたせ舟からのスタートから漁船からのスタートに変わる

INTERVIEW

変わらない鐘の音が盆の到来と思い出を運んでくる――



新立 和司さん（大泊）

私が競舟を始めたのは第二次世界大戦から帰還した後の 20 歳手前くらいからでした。当時から練習はとて厳しく、漕ぎ方の研究や息を合わせて漕ぐことを必死に練習。人一倍負けず嫌いで中途半端なことが嫌いだった私は、この厳しい練習が好きでした。練習でも本番でも息を合わせるため声高らかに掛け声を出し、力いっぱい舟を漕いだことを今でも覚えています。時には仲間とぶつかることもありましたが、一生懸命取り組んでいたからこ

そ、本番で勝ったときはとてもうれしかったし、負けた時は悔しくてかなり落ち込みました。勝てば来年も勝つぞと意気込み、負ければ次は必ず勝つと決心し、結果はどうであれ次の競舟へのモチベーションに繋がっていました。

舟を漕がなくなった今でも競舟の鐘の音を聞くと当時のことを思い出し、懐かしさとともにことしもお盆の時期になったと感じます。町の伝統行事である競舟大会がこれからも受け継がれていくことを願っています。



戻ってきた、

盆の風物詩—

【写真説明】

1.6. 町のドラゴンボートチーム「津奈木海龍」によるデモンストレーション／2. 大漁旗を振って力漕する選手を応援／3. 舵取りには長年の経験が必要とされ、操る人の腕ひとつでレースの展開が決まるそう／4. 棧橋前からスタート地点まで移動／5. 優勝が決まった後、棧橋前まで全力で漕ぐ／7. 力漕した選手たちをねぎらう／8. 力を合わせ全力で漕ぎ続けることを誓った大川大樹さん（内野）／9. 決勝戦を終えて笑顔の丸岡チーム／10. 水しぶきを上げてスタート／11. 会場に響く鐘の音／12. 優勝旗と賞状を掲げて笑顔の大泊チーム

- 【大会結果】
- ▼優勝 大泊チーム
 - ▼2位 平岡・福浦チーム
 - ▼3位 内野チーム
 - ▼4位 丸岡チーム

8月15日(火) 千拓堤防で第58回町民体育祭競舟大会が7年ぶりに開かれ、15チームが参加しました。競舟の試合は、敗者復活戦ありのトーナメント方式。漕ぎ手10人と艇長・鐘打ち・舵取りが各1人の合計13人が舟に乗り、300mの直線コースでタイムを競いました。

ことしの決勝戦には、内野、大泊、丸岡、平岡・福浦の4チームが出場。1分30秒で大泊チームが平成27年以来的優勝を果たしました。いずれのチームも各地区からの声援を受け、鐘の音とともに水しぶきを上げながら力漕しました。

第58回町民体育祭競舟大会 フォトレポート

力漕



【写真】 決勝戦。互いに激しく競り合い、熱戦を繰り広げました



1. 競舟の楽しさを子どもたちに伝える藤井さん / 2. 舟を漕ぐために筋力トレーニングも欠かさない / 3. マカオでの世界大会出場時の記念写真 / 4. 倉庫には今まで獲得した多くの盾やトロフィーが飾られている

たぎ 熱き思いを滾らせ、世界へ挑戦—

夕方になると大泊地区には勇ましい掛け声と鐘の音が響き渡ります。大会へ向けて練習する津奈木海龍の声です。ここでは、競舟に魅せられ、日々活動する彼らの熱い思いを紹介します。



伝統を繋いでいくため 世界を目指し日々努力

津奈木海龍は昭和63年に結成し、ことしで35周年をむかえます。大阪府で開催されるペーロンの全国大会に出場したいという思いから、当時の海浜地区の人たちが中心になり結成されました。現在は59人のメンバーで活動し、大阪府や滋賀県、兵庫県、鹿児島県など全国各地の大会に参加しています。平成26年にはマカオで開催された世界大会に日本代表として出場しました。

普段の練習は月・水・金曜日の午後7時から。学生や社会人などさまざまな職種のメンバーが集まり、舟の漕ぎ手も10代〜50代と幅広い年代がしています。練習以外にも、町内イベントでの出店や町内の草刈り作業も実施。今後は、競舟の文化を次の世代につないでいくために体験会などのイベントを予定しています。「練習や大会だけでなく、地域との交流も大事にすることで地元から愛されるチームにしていきたい」そんな思いを胸にキャプテンの藤井大樹さん（大泊）を中心に日々活動しています。

目標達成のため活動している津奈木海龍ですがコロナ禍になり、大会

が無くなったことでここ数年はメンバーも減少。活動が難しくなった時期もあったそうです。それでも熱い思いを絶やすことなく、練習だけは欠かすことなく続けてきました。コロナが落ち着いたことしは、8月に水俣市で開かれた競舟大会で優勝。若いメンバーが新たに加入したことで、ベテランと若手が融合した新生「津奈木海龍」として幸先の良いスタートを切りました。現在は9月に兵庫県相生市で開催される大会に向けて練習に励んでいます。いつかまた、世界の舞台に立つために。彼らは今日も舟を漕ぎ続けます。



↑水俣市の競舟大会で優勝し満面の笑みを浮かべるメンバー

もう一度、あの舞台へ—



藤井 大樹さん（大泊）

中学・高校で艇長をしていて当時の選手たちの漕いでいる姿に憧れていました。競舟や海龍の存在が地元での就職を選んだ理由の1つです。私たちが9年前にマカオでの大会に出場以降、日本代表として海外の大会に出場できていないので、キャプテンとして現メンバーで大きな大会で結果を残すことが今の目標です。

若手として次世代を引っ張っていききたい



新立 颯さん（大泊）

競舟は全員の息が合わないと速く進まない究極の団体競技だと思っています。客観的に見ると、ただ漕いでいるように見えますが突き詰めるとかなり奥が深いです。競舟はまだマイナーな競技。チームの若手としてこれからもっと競舟が盛り上がるよう、楽しさや奥深さを広めていきたいと思っています。

漕ぐことが生活の一部

伝統ある競舟を次の世代に伝えるために若い人が加入してくれるようなチーム作りや意識を持って活動しています。競舟には高校生から地区の選手として出場していて、どんどん熱中していきました。地区の方からの誘いもあり、海龍に入り、今では漕ぐことが生活の一部です。そしてこのチームのメンバーであることが私の誇りです。



津々木 滉大さん（日当）

日常では味わえない快感がそこにある

元々は県外に就職していたのですが、SNSで同級生が海龍で頑張っている姿を見て、自分もやってみようと思い地元に戻ってきました。今の目標は筋トレを増やしチーム1番のパワーを身につけることです。競舟の魅力は全身を使って舟を漕ぐ爽快感だと思います。もっと自分を追い込み、筋力や技術に磨きをかけ、大会で良い結果を出したいです。



桑原 健さん（中尾）

伝統を絶やさないために 次の世代へバトンをつなぐ――

漕ぐ距離や人数、場所は変わっても現代まで受け継がれてきた競舟。しかし、漕ぎ手不足により再び存続が危ぶまれています。そんな中でも「競舟という伝統を後世に残していきたい」という思いを胸に立ち上がった人たちがいます。その一人の新立豊さんに話を聞きました。



新立豊 さん（大泊）



↑相生市から寄贈されたドラゴンボート。ことしの競舟大会でお披露目も兼ねて津奈木海龍がデモンストレーションを実施し、新立さんもメンバーとして舟を漕ぎました。

今でも鮮明に思い出す 競舟の記憶

小学4年生頃から乗り始め、今でも舟を漕いでいます。若い頃は競舟に乗って干拓や湯の児に行ったりもしました。当時の私にとっては競舟は盆の風物詩でもあり、遊び道具の一つでもありました。それくらい競舟は慣れ親しまれたものです。盆の時期になり、鐘の音が聞こえてくるとすぐワクワクしています。以前は漕ぎ手も多かったのですが、練習では漕ぎ手は順番待ち。自分が漕ぐ番が来るのを心待ちにしていたことを今でも覚えています。

競舟文化をつないでいくために

近頃は少子化で町にも若者が少なくなってきました。このままでは競舟の文化が途絶えてしまうのではと感じていました。そんなとき津奈木海龍が大阪の全国大会に出場したときに知り合った兵庫県相生市の方から「ドラゴンボートの大会をやらなか」と言われ、令和2年に12艇の舟をいただきました。以前から大会の企画はしていましたが、これが大きな転機でした。昨年、町でドラゴンボートの大会を開催するために実行委員会を設立。県外からもチームを呼んで来年6月頃を目途に大会を開催する

計画を進めており、小中学生の部門も作る予定です。今の小中学生はコロナや災害で競舟を知る機会がほとんどありませんでした。大人になってからでは競舟に触れ合うきっかけがなかなか無いのが現状。だからこそ子どもの時期から舟を漕ぐことに慣れ親しんでもらいたいです。競舟の魅力は漕いでるときだけではありません。終わった後は各地区の打ち上げがあり、地区ごとで世代を超えて交流することができず。競舟文化を守っていくことは地域の交流を深めることにもつながります。競舟が少しでも町の活性化の手助けになることを願っています。

江戸時代末から受け継がれてきた競舟。その文化は一度途絶えたこともありましたが。そんなとき、人びとを立ち上がらせたのは「この伝統を絶やしてはいけない」という思いでした。

伝統を守り、つないでいく――

今では津奈木の盆の風物詩とも言える競舟ですが、現代に受け継がれてくるまでにたくさんの人の努力と行動がありました。「お盆は鐘の音が聞こえてこんととぜんなかとよー」（とぜんなか＝さきみし）新立和市さんの言葉です。この伝統を絶やすことなく受け継いでいくために、私たちにできることは競舟のことを知り、その思いを次の世代へつないでいくことではないでしょうか。

「カンカンカン」――

この鐘の音がいつまでも津奈木の海に響き渡ることを願って――

【特集】津奈木の海に響く鐘の音（完）――

